

路上の大学に学ぶ

——ミャンマーの古本屋——

石川 和雅

●足下をみる

ヤンゴンの路上では、足下に注意しながら歩く。道の状態が劣悪だからだ。都心部の歩道であつても、至る所に舗装のはがれた穴だとか、ふたの無い排水溝がある。地面に吐き散らされた、真っ赤なキンマの噛み汁などもできれば踏みたくはない。眠り込んでいる野良犬を蹴り飛ばしたり、踏みつけたりしないようにも気をつけなければならぬ。

足下に注意を向ける理由はもうひとつある。路上に転がる「玉」を探すためだ。人通りの多い通りでは、歩道の半分程度を占めて露店の古本屋が店を出している。広げたブルーシートの上に、巨大な頭陀袋に詰めて持ってきた本を適当に並べ、客を待っている。埃にまみれた本の山のなかから、文字どおりの「掘り出し物」がみつかる

ることもある。だから、何か変わった雰囲気や表題の本がありはしないか、視界に収まる限りに意識する。

それというのも、ミャンマーでは古い図書に巡り合う機会が限られていたためである。二〇一一年以降、ミャンマーは民主主体制への改革に舵を切った。出版分野でも規制緩和が進み、大型のショッピングモールや書店が現れた。おかげで新刊書を手に入る機会は増えたが、古い専門書となると、まだ探し出すのが難しい。何らかの論文を読んで、参考文献一覧を頼りに研究史を遡ろうとしても、すべての本をみつけ出すのは至難の業である。

その最大の理由は、図書館の利用が著しく困難であることによる。ヤンゴンには国立図書館や、諸大学中央図書館といった国内最大規

模の大型図書館が集積されている。

しかしこれまで、外国人が利用するためのハードルが非常に高かった。まず、利用手続きの方法がわかりづらい。詰まるところ、図書館を管轄している省からの許可が必要なのだが、国立図書館は文化省、諸大学中央図書館は教育省というように、それぞれに管轄が異なるため、許可申請を別個に行う必要があった。そのうえ、各省への申請方法は明示されておらず、人づての情報を頼りに進めざるを得ない。

利用許可が下りてからも困難は続く。本の検索方法は、昔ながらのカード方式しかない。探している本のカードをみつけ、請求番号が判明しても、その本が行方不明であることも多々ある。順調に本をみつけられても、コピーや貸し出しでまたつまづく。申請方法が

極めて煩雑であるとか、サービス自体が行われていないこともある。ならば、図書館に通い詰めて読むしかない。が、これもまた難しい。図書館は基本的に平日のみ、午後四時半の閉館である。授業が平日にぎっしり詰まっている学生や留学生としては、授業をうまく休まない限り利用できない。

図書館の利用機会がこのように限られているがゆえに、市中の古本屋は、様々な知識体系・学術情報にアクセスするために不可欠の抜け道となる。外国人研究者にとっては特にそうだし、ヤンゴン市民にとっても同様だ。古本屋が並ぶ一帯では、通行人が足下に目を向けながら進んでいく。

利用しているうちに、顔なじみの店ができてくる。やがて、注文して本を探してきてもらうようになる。こちらの関心領域を把握した古本屋は、逆に関係しそうな本の売り込みをしてくるようになる。まるで、大手通販サイトのサービスのよう。熟練した古本屋の知識量は膨大である。それゆえ、良い古本屋は学生や研究者にとって、ミャンマー語図書の最良のレファレンス係であり、研究パートナーとなるのである。

●ミャンマー各地の古本屋

ミャンマーの最大経済都市ヤンゴンには、新刊書店や古本屋が集中する本屋街がある。ダウンタウンのほぼ中心、パンソーダン通りの周辺だ。最近では、東京の神保町にたどって紹介されることもある。本の町には喫茶店が欠かせない。神保町に多くの喫茶店があるように、パンソーダン通りには露店の喫茶店がある。ここでは練乳入りの濃厚な紅茶を啜り、青トウガラシと生ニンニクを齧りながら、古本屋と話し込む。

この界限には、露店の古本屋も、店舗を構える古本屋も揃っている。露店の場合、木製の本棚を設置し、そこに配置できない本はその前面に並べるか、山積みにする。乾季



ヤンゴン パンソーダン通りの古本屋
(2015年7月、筆者撮影)

の強烈な日差し、雨季の急な雨を避けるために、ブルーシートで仮設の屋根を設けることもする。

本の品揃えは多彩、というよりは雑多だ。もちろん主役はミャンマー語の古書だが、英語、中国語、そして、日本語や韓国語の本も混じっている。古書の姿も、補修を受けていたり、コピー本だったり様々だ。数十年前に出版された本の場合、紙質が悪く劣化が進んでいる。触るだけで崩壊しそうな本や、脱落しかかったページが多くなる。そこで、補修が施される。表紙を厚紙やプラスチックのシートで代替し、紐で綴じなおす。近辺にはこのような業者の店もある。数が少なく需要が大きい本については、コピー本が出回ることとなる。雑誌に掲載された論文がコピー本化されて流通していることもある。もちろん、執筆者はまったくそんな事情は把握していない。パンソーダン通りの周辺には、歴史的な景観を形成するコロニアル建築が多く残る。それだけに、カメラを抱えた外国人旅行者の姿も連日途絶えることがない。今では、このような外国人観光客も古本屋の顧客となっている。

小道に入ると、店舗をもつ古書

店が点在している。集合住宅の一階部分に入居した店が大半だ。店内には本が山積みされている。外部の人間には本を探すことすら困難だが、店員は何がどこにあるのか、かなり正確に把握している。

古本屋の集積があるのはヤンゴンだけではない。国内第二の都市マンダレーにも、老舗の古本屋が存在する。市内有数の商業地であるゼージョー市場の周辺に、常設の店舗をもつ新刊書店、古本屋、出版社が集まっているが、特に古本で有名なのは夜市だろう。

ゼージョー市場の前を南北に走る幹線道路、八四番通り。日中は近郊各地へ出発するトラック・バスとバイクで混雑を極めるが、市場が閉まる夕方以降は車両の進入が禁止され、路上に露店が並ぶ夜市が行われる。独立後に始まったものだという。かつて社会主義時代、経済が鎖国状態にあった頃には、ヤミ貿易でもたらされる商品の取引で賑わったという。

台車で運び込まれた本が並べられ、申し訳程度の電灯が吊るされる。ヤンゴンの古本屋でもあまりみかけない希少本がみつかることもある。観光ブームのただなかにあるマンダレーだが、この夜市は

まだ昔ながらの雰囲気を保っている。ただ、新興の商業施設や飲食店が増えた影響か、夜市への出店数や来客は減少傾向にあるようである。

遺跡の町バガンにも古本を扱う店がある。観光客が集中する有名パゴダの門前で、土産物屋に混じって営業している店だ。このような店は、英語で書かれた観光客向けの遺跡ガイドや、歴史関係の本に品揃えを特化させている。

このように各地に点在する古本屋は、古本屋同士のネットワークで結ばれている。マンダレーやバガンを回っているとき、顔見知りのヤンゴンの古本商と鉢合わせになることが度々あった。聞けば、マンダレーには仕入のため、バガンへは知り合いの店への販売のための営業旅行だという。ミャンマーにおける図書の流通は、このような小規模業者の活動に頼る部分が依然として大きい。

●古本屋業界の歴史

公的機関が実現できない、本に対する需要への供給を行う。ミャンマーの古本屋が担う機能は、詰まるところこのように要約できるだろう。だがこうした機能は、近



マンダレー 夜市の古本屋 (2015年7月、筆者撮影)

年始まったことではない。

「パレットパウン・テッカトー」あるいは「ランベ・テッカトー」というミャンマー語の言葉がある。それぞれ「歩道上の大学」、「道端の大学」といった意味で、路上の古本屋のことを指している。ミャンマーにおける古本屋の歴史は、近代出版物が導入され始めた植民地時代にさかのぼる。当時の古本屋も、知識の伝達経路において重要な役割を担っていた。古本屋から大きな「学恩」を受けたミャンマー人知識人らが、親しみと敬意をこめて、こう呼ぶのである。そのような知識人の古本屋との関わりを、彼らの回想録からひろってみたい。

まず、二〇世紀を通じて作家、

ジャーナリストとして活躍したゼーヤーの経験をみてみよう（参考文献①）。ゼーヤーは高校修了後の一九二〇年、二〇歳のときに初めてヤンゴンを訪れた。大学に進学する機会こそ得られなかったが、雑誌『ダゴンマガジン』編集の仕事をきっかけに、出版業界でのキャリアを形成していく。そんな彼が、見識を広めるきっかけとなった古本屋との交流について記している。

彼が少年時代を過ごした二〇世紀初頭のミャンマーでは、出版業界はまだ草創期にあった。ヤンゴンから離れた地域では、まだ本自体が珍しく、学校図書館へ行って蔵書の質量とも不十分で、存在しないに等しい状態だった。本格的な書店を目にすることができたのは、ヤンゴンに出てきてからのことだ。

ヤンゴンの市街地中心部、市庁舎の隣に、高い塔が目を引くコロニアル建築が建っている。ここは、植民地時代にはロウ・デパートメントストアとして使われていた。ゼーヤーが初めて書店で本を買ったのは、この場所だったという。当時のヤンゴンには新刊書店がまだ数店しかなく、しかも新刊書は

高価だった。そのため、当時の月給で多くの本を購入することは困難だった。

安価に多くの本を読みたい、という彼の希望を満たしたのは、路上の古本屋だった。南インド系住民が、捨てられた本や雑誌を拾ってきて売っていたという。ここでは、状態こそ悪いものの、様々な分野の本を格安で入手できた。読書経験を蓄積し、視野が広がるにつれて本への要求は高度化する。

やがて、古本屋に対し、本を効率的に集める方法を提案するに至る。その方法とは、イギリス人が多い地区を回り、彼らが捨てた本を従者であるインド人から買い集めるというものだった。この方法は功を奏し、ほどなく流通ルートが確立されると、古本屋街も成長を遂げていった。

ゼーヤーは、古本屋の記憶を次のように結んでいる。

「我々のように、運に恵まれず大いに進学できなかった者は、大学で得られるはずの知識や見識を、自力で支払える少額の金銭を払って、そうした古本屋から得たのだ。まったくもって、古本屋は貧者の大学であった。彼らへの恩は大きい。彼らがいなければ、我々

が広い知識を得ることはできなかった。」

ジャーナリスト・グエウーダウンも、古本屋稼業の経験を回想録に残している（参考文献②）。一九一五年生まれの彼は、ゼーヤーよりも若干遅く、一九三一年にヤンゴンへやってきた。日本軍の占領時代に古本屋を営んだ経験がある。場所は、シユエダゴンパゴダの東側参道。開店こそしたものの、本の仕入れが不安定で、閉店していることもしばしばあったという。店には、遠方からの買い付け客が訪れていた。本の流通機構が未整備だった時代にあつて、遠隔地への本の流通を担ったのは、このような個人的な業者の活動であつたようだ。

民間の図書流通ネットワークは、独立時の図書館復興にも貢献している。当時ヤンゴン大学図書館で勤務していたタイツソーが回想している（参考文献③）。ヤンゴン大学図書館は市内有数の大型図書館だったが、戦災により損傷し、多くの蔵書が失われた。独立後、図書館の再開に向けてミャンマー語資料を中心に蔵書の再収集が行われる。このとき、個人の蔵書家が収集していたミャンマー語定期

刊行物類や、民間人が市内各地から買い集めてきた古本が収められた。

二〇世紀前半のミャンマーは、植民地支配と戦争という知的活動の継続のうえで非常に困難な時期を経験した。公的機関は十全に機能しない状態が続いたが、非公式な図書の流通ネットワークが、可能な限り需要に応えていた様子が窺える。

公的機関の機能不十分という状況は、独立後も同様である。長期化した軍政下において、自由な知的活動や出版活動は著しく制限される。しかし、古本を所蔵・流通させるネットワークは強靱かつ柔軟に存続し続け、現代社会にも恩恵をもたらしているのである。

● 変革の時代を迎えて

図書を取り巻く環境が不利な時代であっても、しぶとく知識の伝達を担ってきたミャンマーの古本屋。しかし、昨今迎えつつある変化は、これまでとは大きく異なる性質のものばかりだ。

まず、場所の問題がある。経済開放政策により、ヤンゴンをはじめとする各都市は、自動車の急増

に悩まされている。とりわけ、植民地時代以来の道路構造であるヤンゴン中心市街地の状況は悲惨である。かつて広幅員だった歩道は、車道と駐車スペースを確保するために多くが削り取られた。通行の妨げになる露店への風当たりも強まる一方で、行政による出店規制強化が進む。古本屋への影響も避けられないだろう。

次に、公的機関の整備による環境の変化がある。これまで旧態依然としていた図書館は、面目を一新しつつある。文化省、教育省の傘下にある大型図書館をはじめ、全国各地の公共図書館、学校図書館に対して海外からの支援が入り始めた。首都ネーピドーには新しい国立図書館が開館し、難点だったサービスの貧弱さは改善しつつある。たとえば、外国人による利用が手続きなしで可能になった。コピー機、コンピューター等の整備にも重点が置かれている。まだ完全ではないものの、OPACや蔵書を電子化して公開するサービスの導入も進む。

最大の変化は、世界共通の動向でもある新たなメディアの出現である。スマートフォンやタブレットPCの急速な普及により、出版

業界は強烈な影響を被っている。出版物の事前検閲制度が二〇一二年に廃止された結果、政治関係本の発行が容易になり、民間の週刊ジャーナルや日刊紙の創刊も相次いだ。業界の発展が期待されたが、人々の読書習慣の変化はより急激だった。SNSサイトの利用が急増するにつれ、紙のジャーナルや本の売れ行きは伸び悩んでいる。一時、百花繚乱だった新創刊のジャーナルは、現在その大半が休業刊状態である。新刊書の価格も上がっており、紙の本離れに拍車をかけている。このような時代に、古本屋の役割はどのように変化していくのだろうか。

● おわりに

重く苦しい近現代史を歩んできたミャンマー。植民地統治、戦争、そしてその後の軍政時代と、ミャンマー国内での知的営為は度重なる脅威にさらされながらも、途絶えることなく今日まで受け継がれてきた。それを水面下で支えてきたのが、古本屋のネットワークだ。このネットワークの恩恵は、ミャンマー人知識人のみならず、外国人研究者も大いに受けている。研究活動が制限を受けていた時代

にあつて、ミャンマーの知の体系にアクセスする最善の道は、古本屋であり続けた。植民地時代を経験したミャンマー人知識人も、現代の研究者も、ともに「路上の大学」の学徒である。

ここから得られる文献資料にも、このような領域を存続させてきた人々の営為にも学ぶべき事柄は多い。そして、その成果は次なる受益者に伝えていかなければならないだろう。

(いしかわ かずまさ／前上智大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士後期課程)

《参考文献》

- ① Zeiyya, Myamma Myetpawung Sa dhalei. (ミャンマーの宝・文学の伝統) Htein Wing Sapei hpran hkyi rei. 1962.
- ② Ngwei U Daung. Sa winkabha. (文学迷路) Pinya aing pra Saouk talk. 1963.
- ③ Taik So. Pinya Thaik. (知識の巢) Nikkala Sapei. 2011.